

老舍研究会会報 第14号

胡絮青女士 題字

『老舍文学詞典』を読んで

藤井栄三郎

この二月に発行された『老舍文学詞典』を最近一読し、非常に優れた工具書だと感じたので、その報告をしたい。

この文学辞典は巻頭の凡例に、「『老舍文学詞典』は老舍の文学創作に関する辞典である。その目的は老舍文学作品及びその創作思想と芸術の特徴を全面的に紹介し、読者が老舍作品中の北京語を的確に理解することを助け、時間的に遠く隔たり、地域が異なり、習俗が同じでないために起こる閲読の困難を解決することである。」と編纂目的を掲げ、この辞典を「老舍著書の閲読と研究の基本工具書」と規定している。そして如上の編集目的を本辞典は十分に果たしているように見える。私はこの辞典を比較的丹念に読み通したが、読み進んで行くうちに、それが膨大なエネルギーと努力の結集であるのを感じて感動した。後記によればこの辞典は十余年を費やし、各地の研究者及び教授者を組織して執筆が進められ、主編の舒濟氏とほか十二名の編著者が閲覧、修訂、討論、補充などを重ねて出来上がったものだという。私の読後感では、この辞典は現在までの調査、発見、研究の広範な成果を踏まえ、1999年版19巻本『老舍全集』中の作品を、日記と個別篇目を除いて全部収載し、確固たる編集方針によって編まれた、最も優れた老舍研究の工具書である。自分の知見の狭さを恐れずに言えば、このような内容と形式を具えた工具書を中国現代文学研究の分野で見たのは初めてで、その意味

ではこれは出色のものではあるまいか。工具書として機能性と情報の客観性、綿密さ広範さを併せ具えた点で、これと比肩する個別作家辞典が他にあるだろうか。この辞典の内容と編集について所見を述べる。

まず、凡例に続いて収載された全4700余の語句条目のジャンル別漢字画数順目次が82頁に渉って掲げられ、それから詞典正文となる。正文は大きく作品編、人物編、語言編に分かれる。作品編はさらに小説、戯劇、散文、詩歌、曲芸、作品集、翻訳作品、外文作品の各巻に分かれる。人物編も作品人物巻、歴史人物巻に分かれ、更に分野別に分かれている。だから例えば作品研究にしても、一つのジャンルの作品がそれぞれ一群にまとめられているので一覧性が高く、ある作品について基本的な情報が得られるだけでなく、ついでに題材や主題の近似した作品が他にないか、捜し出すことなども比較的容易であろう。

【作品編・小説巻】：老舍の小説研究のためには、実はこれと『人物編・作品人物巻・小説人物』とを併用すると、面白いし便利である。ストーリーの概略がわかるだけでなく登場人物が加わるので、その作品を読んだことがある場合には、記憶の中からその世界が立体的に立ち上がって来るような感じがするし、まだ読んでいない作品まで読んだような気になれるのが嬉しい(!)。同じことが『戯劇巻』と『戯劇人物』についても言えよう。

まず作品題名に続いて、長中短篇の区別、執筆時期、初載の誌名と巻・期、掲載年月日等。長編の場合は何万字と字数で長さを示す。

次に単行本初版年月と出版社名、更に再版以降の年月、出版社名を漏らさず列記し、最後に1999年版19巻本第何巻に収録されているかを記す。外国に翻訳のある場合はその訳者、出版社等を付記している。作品によってはこの部分だけで1頁を越える。版本間の字句の異同等を調べるのに便利であろう。

小説の内容紹介はストーリーの概要を記述するだけに止め、老舎自身のその作品についての説明などがある場合は、その主要な原文のみを引用しているが、他人の批評やその条目の執筆者の評価などは入れていない。これは凡例に明示されている編集方針であって、小説のみならずすべての条目に厳格に守られている。だから例えば、『猫城記』の記事は後半全部が感想や批評になっているが、それもすべて作家自身の文章から抜き出し、出所を付記して解説に使っているのもであって、研究者にとってはやはり見逃せぬ資料なのである。この辞典の工具書としての信頼性と機能性はこのような点にも在る。

【戯劇巻】：条目の構成は小説巻と同じである。戯劇は解放後の作品が圧倒的に多く、当代社会の色々な事件や問題と、老舎がどのように向き合っているかを見る事が出来る。小説同様に、戯劇作品と戯劇人物の条目を併せ読むのがよい。

ところで、この辞典は作品条目の執筆者のその作品に対する評価などを入れない方針を厳守しているが、全く評価を入れないというわけではない。例えば独幕話劇『生日』は「三反運動」を背景とした作品だが、「先頃起こったばかりの三反運動を彼がまだ熟知していなかったため、作品が単純化された政治の説教に流れ、人物の形象も生命力がなく、老舎の作品が常に有する芸術的輝きを失ってしまった。」と批評している。しかし、客観的に見て、読者や観客の誰もが認めると考えられる作品の欠点についてのこのような率直なコメントは、条目の客観性を保持する妨げとはならないであろう。

【散文巻】：散文巻はさらに散文、幽默文

及び小品、文論、政論、序跋、書信、工作報告に分かれる。政論、工作報告は文協の会務報告をはじめ、老舎の勤勉で精力的な工作者の一面を示すもので、作家の全体像を見るためには欠かせない。その意味で21才の小学校長時代の教育報告まで掲げているのもよい。しかし、文学研究者愛好者にとって利用度の高いのは他の5分野の条目であろう。併せて975編あるこの分野の文献は、ほんの一部を挙げても、作家の若き日の文学教養と文学主張を窺う事の出来る『文学概論講義』の詳しい記事あり、30年代のユーモア散文の風刺と遊び、小品文の人間批評や文章の味わいの指摘ありで、開放後は殆ど取り上げられることのない老舎文学の多様な面を、時にはかなり詳細に紹介している。書簡にも一々解説をつけているが、林語堂や陳逸飛に宛てた手紙などには、引用された短い文章を見ただけで思わず笑い出してしまった。その一方、例えば文論条目『読巴金的「電」』の中で引用されている老舎の批評には巴金への作家としての高い尊敬と同時に鋭い批判があり、彼が簡単に概括できる作家ではないと感じさせる。この辞典はどんな小さな作品も遺漏無くとりあげて条目にしている上に、一覧性が高いので、漫然と頁を繰って拾い読みをしても、色々と思考を誘発されるのである。

【人物編・作品人物巻】：『老舎文学辞典』の特異点はこの作品人物巻の新機軸であるよい意味での網羅性に最もよく表れている。作品人物巻はさらに小説人物と戯劇人物に分かれるが、小説人物の取り上げ方の新工夫が目を見張る。まず、従来の文学辞典、小説鑑賞辞典のように主要人物だけを取り上げているのではない。長編短編を問わず、登場人物には端役の末に至るまで、全部条目を設けている。绰名、職業や地位、父親、母親、大姐などの呼称だけで呼ばれている人物も同様である。裏長屋の住人も、最下層の売春婦も、凡そ老舎の小説世界に一つの類型として表れている人物は一人残らず取り上げているようだ。例えば長編小説『蛻』に出てくる太った警官

「胖警官」のような大筋には関係のないちよいと出の端役まで、独立した条目を設けて紹介しているのである。そして、この方法を追い続けた延長線上に、「猫人」（『猫城記』）と「我」という条目も設定されたのであろう。『猫人』の条目は火星の猫人国の国民の人格喪失と国家民族の衰微と滅亡を詳細に紹介している。実際、この物語りの主役は広汎な猫人たちであって、物語の表面に現れる権力者もその周辺の人々も、この大観衆の流れに浮かんで滅亡の淵に落ち込む粟粒のような存在に過ぎない。しかし、このような群像に独立した条目を立てたのは新しい試みであろう。そしてこの新しい試みと、前述の「ちよいと出」の太った警官の条目まで設けていることを突き合わせて考えると、小説人物編の条目設定は、老舎の創作方法に密着したものであることがわかる。

『我』は一つの条目となっているが、①から②までの番号を付けて、20篇の一人称小説のナレーターについて解説している。その解説を眺め較べると、これらの「我」と作家の関係など、色々考えを誘われることがありそうである。

『作品人物巻』につづいて『歴史人名巻』があり、古代と当代に別れているが、創作その他なんらかの意味で老舎と関連のある人名が、これも彼の著作を中心に綿密に収集され、例えばある人物がどの著作に出ているかがわかるのは勿論、様々な情報を得ることが出来る。巻末には作品、人物、語言全編の音序索引が付してある。『老舎文学詞典』は役に立つ工具書だが、同時に、読んで面白い辞典なのである。『語言編』その他は、どなたかのご意見をうかがいたいと思っている。

死から浮かび上がるもろもろの事
傅光明編『老舎之死探訪実録』について

杉本 達夫

老舎は文革の初期に紅衛兵たちから暴力に

よる糾弾を受けたあと、命を絶った。

本書はその死を中心に据えて、40余人へのインタビュー記録と数人の文章を併せて一書としたもので、老舎の人と文学を多角的に照らし出している。全編に溢れるのは、すぐれた文学者の死を惜しみ、死に追いやった政治の不条理をを衝く声である。編者傅氏はインタビューに当たって3つの柱を立てた。1. 老舎の解放後の創作をどう評価するか、2. 解放後政治運動の中で老舎が果たした役割をどう見るか、3. 自殺の理由を何だと考えるかである。1も2も、3に収斂されてゆく問いかけであり、いずれもひとつの結論を得ているわけではない。いや、とうてい結論の得る問題ではない。

老舎はアメリカから帰国後、共産党政府から厚遇され、さまざまな役職についた。党の宣伝マンに徹した劇や文を書く一方で、『茶館』や『正紅旗下』のような、政治に関らない作品を書いていた。身は党外にありながら、胡風批判や反右派闘争に際しては、批判者となって発言し、しかも自らは批判の圏外に置かれていた（「日本人を自宅に招いて酒を飲み、菊をめぐる事を許されている唯一の作家」という王蒙の印象がある）。老世代の作家が書けないでいるとき、なぜ老舎だけが矢継ぎ早に書けたのか、宣伝劇は本気で書いたのか、その場しのぎなのか、批判の発言は本心なのか、偽りなのか。こうした疑問に対して、身近にいた人でも見解が分かっている。ということとは、そういう問いかけをすることも、友人に本音を明かすことも許されない社会に、誰もが生きていたということである。

死ぬ前日の糾弾については、現場に居合わせた人々が生々しく惨状を語っており、その証言から、さまざまな偶然が重なって悲劇を生み出したことが知られる。暴力をふるった北京女八中の紅衛兵、かつての少女たちの証言は無い。老舎が文革の事態を理解していなかった不思議さと言う人もあれば、老舎が政治的に未熟であり、生きのびていたら文革礼賛の劇を書くことになっただろうと推測する

人もいる。

作家、研究者、組織の職員、さまざまな立場の人が見解を述べており、その人と老舎との距離に応じて濃淡の差を見ることができるのであるが、私には、漢人社会における満族の位置から説き起こして、老舎の人格形成と文学を論じた王富仁氏の一文と、文革を知らぬ世代の視点から、文革を潜りぬけた世代を批判する逸冥氏の見解が、とりわけ印象に残っている。後者は日本の戦後世代の戦中世代に対する批判と共通する。(中国広播電視出版社。1999年12月刊)

英語訳《丁》について

布施 直子

このほど、老舎の短編小説集がアメリカで出版され、《丁》がそのうちの一編として英訳されている(注1)。《丁》は「避暑録話」(＜青島民報・副刊＞1935年夏)に掲載された短編で、一人の男が夏の青島の浜辺に来て一日を過ごす間に、海で遊んだり浜辺を歩き来する人間たちそして青島の景観を見ている色々なことを思う、その意識の流れを書いている。英語に訳された《丁》を読んで、前にとらえどころがなかったものが、一つにつなごうとした感じがした。英訳を読み、原文に返り、というふうにして読んだ結果、急に生き生きと感じられてきた語がある。英語訳では思いきった訳語をあてていて、たとえば、小説の書き出しの“海上の空气太硬”を英訳では“The ocean air’s stifling”と訳している。“空气太硬”はこの短い小説の中に三回現われ、“硬”を単に「風が強い」ということ以上の、英訳の“stifling”の「窒息死する」「息苦しい」感覚をいうものとして受け取ると、続く文中で“疲乏了了的啊波罗(疲れたアポロ)”として登場する丁の形象と繋がってくる。“空气太硬”という表現がこの小説中に三回現れることから、作者はこの語を意識的に用いていると考えられる。また、丁の水着について

だが、原文中に4回現われる。それらは、“新的浴衣贴在身上,” “懒得起来,还是得起,海空气会立刻把背上吹干。” “他提着湿的浴衣,顺着海滨公园走。” “丁只有一身湿的浴衣。” “把浴衣放在黄石上,他看着海,大自然的奥秘。”と叙述され、これらの部分についての英訳文をみると、

The new swimsuit feels clammy. (注2)

Holding the damp swimsuit, he walks along the seaside park. (注3)

Ding only has a body with a clammy swimsuit. (注4)

Placing the damp swimsuit on the brown rock. (注5)となっている。

「冷たくてべたべたする」「じっとりとした」「よそよそしい」を意味する“clammy”、“湿気のある”「じめじめした」を意味する(dryよりも多少不快な感じをともなう)“damp”の二語を使い分け、いずれも不快な語感を持つ語に置き換えている。水着が出現するたびに不快な感じをともなう語として訳出しているのは、どういうことだろう。小説中丁の着衣についての記述は水着についてしかない。自分の水着に不快を感じている丁を訳出することによって、翻訳者は丁がこの時代に適合できないことを暗示しているように思う。

丁は、足指に小さな波が口づけするにまかせて浜辺に坐っている、ここはどこかギリシヤふうで、彼は疲れたアポロである。わが胸をたたくと、その肺はあまりに薄く、自分が結核にかかっていやしいかと心配する。丁にとって海は死のイメージであり、海で溺れたり、栄養が足りない若者の死が海と重なっている。丁は百五十元の俸給をもらっている公務員だが、偶然ここで一緒になった、同僚の孫とはちがって独身がいいと思っている。彼にとって小孩子は“可怕”な存在なのだ。丁は目に映ることごとくに対して、この日一日中「中国の進歩」についての思いを発せずにはいられず、“中国有了进步”“中国没进步多少!”の間を揺れ動く。「窒息しそうな

「息苦しい」海上の空気と、自分の水着にたいする度重なる不快感はこの時代に生きるインテリの生きにくさを暗示している。結核を怖れ、子供はいらない、疲れたアポロは中国自身であるかもしれない。

(注1) 短編小説集の書名、出版社、

《丁》の訳者、所収作品

Blades of grass : the stories of Lao She
1999 University of Hawai'i Press
William A. Lyell and Sarah Wei
—ming chen

《开市大吉》《老字号》《不远千里而来》

《黑白李》《也是三角》《老年的浪漫》

《热包子》《生灭》《邻居们》《歪毛儿》

《丁》《不说撒谎的人》《兔》《恋》

(注2) p165 (注3) p170 (注4) p170

(注5) p170

世紀末中国における老舎

杉野 元子

筆者は1998年4月より2年間、北京に滞在したが、その間の1999年2月におこなわれた老舎生誕100周年記念行事についてすでに「中国図書」（1999年4月号、内山書店）にレポートを発表した。そこで今回は1999年3月以降の中国における老舎関連の新しい動きについて、北京滞在中の見聞をもとにしていくつか紹介をおこなう。

1. 京劇「駱駝祥子」と評劇「祥子與虎妞」
江蘇省京劇院の京劇「駱駝祥子」は1998年年末から年始にかけておこなわれた第二回中国京劇祭で金賞を受賞したため、1999年2月に再び北京に招かれ長安大劇場にて6日間連続公演をおこなった。そして1999年8月に瀋陽でおこなわれた第六回中国戲劇祭にも参加し、総合で「曹禺優秀劇目獎」を受賞したほか、個別に「優秀編劇」「優秀導演」「優秀表演」「優秀作曲」「優秀舞美設

計」「優秀燈光」などの9つの獎も受賞した。いっぽう今年に入り、小説「駱駝祥子」をもとに改編した評劇「祥子與虎妞」が3月4日、5日の二日間、北京評劇院青年団によって初上演された。筆者は1999年2月4日に京劇「駱駝祥子」を、2000年3月4日に評劇「祥子與虎妞」を観劇したが、京劇版は冒頭から小福子が登場し、祥子、虎妞、小福子の三人の心理的葛藤を軸に劇が展開するのに対し、評劇版は祥子と虎妞にもつばら焦点が当てられて、小福子は脇役として後半少し登場するのみである。虎妞に強引に押し切られて夫婦となった祥子が次第に虎への愛に目覚め、絆を強めていくという夫婦愛を中心に据えた評劇版は単純化されすぎていて、小福子を絡めた三つ巴の人間模様を描く京劇版と比べ奥行きに欠けるような印象をもった。

2. 話劇「茶館」

「茶館」は1992年7月16日に374回目公演がおこなわれたのを最後に、7年あまりにわたって休演状態が続いていた。しかし、1999年10月12日、改修工事を終えた首都劇場のオープン記念公演として「茶館」が再び舞台上で演じられることになった。今回の「茶館」は現在の中国話劇界をリードする監督林兆華が手がけたもので、斬新な舞台装置、若手人気俳優の起用など耳目を一新するものとなっている。公演は12月中旬まで続いたが、160元、120元、100元、60元という北京人民芸術劇院始まって以来の最も高い値段にもかかわらず、連日大入りだった。またこの新版「茶館」には100万元以上の資金が投入されたが、最初の13回ですでに130万円の収入があり、資金をほぼ回収することができた。筆者は11月2日に新版「茶館」を観劇した。旧版では舞台が茶館という閉じられた空間で占められていたのに対し、新版では舞台左横と奥に二つの通りが作られ、旧北京の歴史や文化の断面がそこを往来する人々の姿を通して観客に伝

わるようになっている。また旧版では王利発の自殺と「団結就是力量」の歌声で幕を閉じるが、新版では老舎の原作通りに沈局長の「ハオ」の声で幕が閉じるようになっている。この他にも数多くの違いがあるが、新旧それぞれ個性的で味わい深く、甲乙がつけがたい。

3. テレビドラマ

1999年にはテレビドラマ「二馬」「駱駝祥子」、「離婚」の放映が相次いだ。2000年3月18日付「北京青年報」によると今年9月にはテレビドラマ「我這一輩子」の撮影が始まるようである。監督は馮小剛が予定されている。馮小剛監督は三年連続して葛優主演による正月映画（「甲方乙方」、「不見不散」「没完没了」）を撮ったが、いずれも好評を博し興行的にも大成功を収めた。また脚本担当は北京電影学院文学系教授馬軍驤で、馬は昨夏放映されたテレビドラマ「離婚」（葛優主演）でも脚本と監督を担当し、成功を収めた。主演は未定だが葛優が最適任者と目されており、葛優も現在脚本を読み、引き受けるかどうかを検討とのこと。

4. 評論

変わり種の評論を一つ紹介する。今年出版界で最初に話題になった本の一つに王朔処女隨筆集『無知者無畏』（2000年1月、春風文芸出版、第1次印刷20万部）がある。この本がマスコミで大々的にとりあげられたのは、王朔がこの本所収の「我看金庸」という一文で文壇の大御所金庸の小説を四天王の歌、成龍の映画、瓊瑤のテレビドラマと並ぶ「四大俗」の一つであるとし、辛辣な言葉で徹底的に批判したからであるが、この本には「我看老舎」という一文も収められている。王朔は「我看金庸」の中で金庸文学をほぼ全膚無きまで批判したが、「我看老舎」の中では老舎作品

の中では『二馬』、『四世同堂』が最も出来が悪い一方で、『断魂槍』、『茶館』には高い評価を与えている。研究者の論文とは異なり「無知者」王朔は自分の読書経験だけをもとにして今まで広く認められている評価を覆すような大胆な発言をおこなっている。王朔の文学世界は老舎と大きく異なるものの、同じ北京方言を操る作家ならではの見識も含まれており一読に値すると思う。

以上中国における老舎関連の新しい動きについて簡単に紹介をおこなった。この他にも現在「第一老舎文学創作獎」の選考がおこなわれており、5月中旬に結果が発表される予定である。老舎生誕100周年を契機に始まった「老舎熱」はこれからも当分続くだろう。

老舎の短編小説

門田 康宏

自身の創作経験を語った文章集《老牛破車》<我怎樣寫短篇小說>において老舎は抗日戦前の自作短篇を三種に類別したが、その分類中、第二・三組の作品が多く収録されている作品集が《老舎短篇小說選》（人民文学出版社、一九五六年）である。第二組は彼が短篇を多産した時期の作品群で、いずれも三度書き直しを行ったと述べており、繰り返し自らの短篇集に再録する。<微神>もこれに属する。第三組は上海事変で消失した長篇小説《大明湖》を短篇化した作品<月牙兒>や、経済的困窮から長篇を切り売りした短篇小説<断魂槍>なども含まれ、彼の意図的な執筆の形跡を辿ることができる。

老舎といえば、ロンドンでの初期作品《老張的哲学》《趙子曰》《二馬》、代表作《駱駝祥子》、《四世同堂》三部作など、長い作家活動において長篇小説によってその名を中国文学史に刻んできたと言えようし、筆者も彼の長篇作品とその資質に魅力を感じるのだ

が、数年前、学会発表がきっかけで上記の短篇小説選を中心に老舎の短篇作品に取り組んだことがある。

老舎の資質が長篇創作に向いているのなら、短篇小説にも長篇的な特性がみられるのではという試みだったが、まず気になったのは現在発見され世に出ている短篇で執筆年代の判明しているものでは、作品数の多さと知名度の高さともに済南と山東時代が際だっていることだった。

その時期の野心作として<微神>はこれまでもよく論じられてきた。現実と幻想世界が交錯する内容、入れ子型プロット処理の構造など老舎としては異色作として位置づけられ、北京の文物が随所に散りばめられつつ庶民の日常が克明に描かれる。《駱駝祥子》とは対極をなす作品であろう。

しかし、それ以上に注目したいのは<月牙兒>と<断魂槍>という、いずれも長篇を短縮化した小説である。

<月牙兒>は'32 第一次上海事変の際、日本軍の爆撃のために焼失してしまった長篇小説《大明湖》が母体となっており、境遇の転変により娼婦として身を落としていく母と娘の過程がふんだんなエピソードでもって描かれている。短編小説において四十三章もの章立ては過剰に盛り込みすぎた印象もあるが、その原型となる作品が完成していた事実が背景にあるだけに、《大明湖》がいかにか愛着のある大作であったかと同時に、短縮化への作者の限界も感じさせる。

<断魂槍>は当初《二拳師》という武侠小说を計画していたが、経済的困窮から十数万字にも及ぶ素材を五千字の原稿に縮小し原稿料を得た作品である。こちらは<月牙兒>とは正反対にエピソードが極めて少なく簡潔なプロット展開をみせ、小説内時間もわずかに半日である。この作品の簡潔性は《二拳師》がまだ準備段階にあったことと本人が「題材を選び出し」「一つの出来事を書いた」と言い残しているのを考えあわせると、短縮化する段階において<月牙兒>とは異質のプロ

セスを踏んだゆえのもので、むしろこの短篇で老舎は新しい作風を試みたとみるべきか。

前出<我怎樣寫短篇小説>において老舎は、上海事変のあと短篇に取り組んだ時点では、<方便>であるからと考えていたものの、その後<工夫不容易找到，而索要短篇的越來越多>と思い直し、<月牙兒><断魂槍>執筆時期には<長篇重視短篇輕視>の態度を改めたと語る。《老張的哲学》《趙子曰》《二馬》で作家的出発をし、短篇の習作期を挟んで世に問うた《駱駝祥子》が彼の代表作になったことを思えば、短篇習作期は作家としての老舎の成熟期を準備したといえよう。

老舎関係文献目録（3）

倉橋 幸彦

(1995年・補)

石子 順 映画明星から政治明星へ
—江青（藍蘋）

『中国明星物語』〔現代教養文庫〕社会思想社（2月28日）p. 236-237

*老舎の死に言及

張 競 恋愛小説の末路

『近代中国と「恋愛」の発見』岩波書店（6月27日）p. 354-355

*「なぜか中国の近代小説では恋愛はつねに借りてきた首飾りのようで、重たくてどこか似合わない。事実、描かれた恋愛がバタくさいほど、歯の浮くような代物になってしまう。逆に『駱駝祥子』（初版）の中で男女関係がわいざつになっても、読者は別になんの不自然さも感じない。だから、気の利いた作家はわざと避けようとした。」

石田 達系雄（武夫）訳『老舎のロマン』

〔学ぶ会ブックレットNO.1〕

文芸タイムス社（10月1日）

定価 1500 円

編集：学ぶ会 装丁挿画：清遠寛亮

149 p

(内容)

◆口絵写真一葉<老舎先生>/はじめに
〔平成7年1月1日〕P3-4/柳家の長屋<柳家大院>、解題3行P.5-29/幻影<微神>、解題5行P.30-56/老境のロマンス<老年的浪漫>、解題5行P.57-80/三日月<月牙児>、解題5行P.81-133/(林芳編)「老舎の主な歩み」P.135-149

*「柳家の長屋〔解題〕」に、「原名を「柳家大院」というこの老舎の作品は一九三四年に良友図書〔印刷〕公司刊行の短編集＝『趕集』に収められたが、その前年(大衆画報)で最初に発表されたものである。」

**「幻影〔解題〕」に、「「幻影」の原名を「微神」と言い、一九三三年九月〔正しくは十月一日〕老舎が三十五〔正しくは三十四〕歳のとき<文学>第一卷第四期に発表した物語です。老舎の原文に見る音調の美しさはどの作品でも同じですが、「幻影」では導入部が特に長く、一首の散文詩を成しており、幻想的で深い味わいを持つこの導入部は、物語全体の詩的昇華と言えるでしょう。」とある。

***「老境のロマンス〔解題〕」に「老舎独自のリズムを以て、人間の愛や恋情を述べつつ「幻影」(原名、微神)とは又ちがって、妻を失い知恵おくれの息子を持つ、或る選歴を迎えた男の悩みを写此の「老境のロマンス」(原名、老年的浪漫)を、作者老舎は37〔正しくは36〕歳(一九三五年)になって《人民文学》〔《文学》の誤り〕の第四卷一期に発表した。」とある。

***「三日月〔解題〕」に「三日月の原名を月牙児という。ついに倫落した若く美しい女性「わたし」が、たまたまその母の悲しい境遇を今更のように知ってしまう前後の描写など、特に老舎ならではの見事な筆致である。本篇は老舎37〔正しくは36〕歳のとき、国聞週報の一九三五年第12巻(12期～14期)に発表された。」とある。

<1996年>

石垣 綾子 石垣 綾子日記

<1946年1月13日>

『石垣綾子日記 上』岩波書店

(2月22日) p.35-36

*「老舎の小説 *Rickshaw Boy*〔註略〕を読み終える。/世の中の濁流に押し流されて、働いても働いても浮かばれない人力車の姿を描いている。現実には踏みめされた彼からは、希望と明日への光は消え去って、絶望の底へ沈んでいく。/人のいい彼。無知文盲の彼が、血と汗の結晶である賃金を、何の理由もなしに失い、それが何度も重なるうちに、彼の健康な心はすり減らされる。それでも、生と希望にかえろうとする努力が、彼の最後の深淵から浮かび上がらせる。凍えるような寒い夜。一人の老人が茶店に転がり込んできて卒倒する。それを介抱し、助ける一群の車夫たち。/そこに作者は弱き者同士の心を結ぶ一つの繋がりを描いている。押しのめされても、美しきもの、暖かきものを忘れぬ虐げられし人々の群れ。それに反して、弱き者を踏み台にして太る上層階級は、醜き心で、笑う心さえ失っている。」

<1949年6月21日>

『石垣綾子日記 下』岩波書店

(3月22日) p43.-45

*『離婚』を読み終えた。主人公のラオ・リーは、過去を受け入れることは出来ないが、

現代の中に飛び込んでいくことも出来ない。彼は、性格は善良で、正しい人間性を持っているが、優柔不断で煮え切らない。自分の面する現実を解決しようとする積極性がなく、いつもその嫌な現実から逃れようと焦るだけである。／そしてこの社会には逃れていく場所はない。リーは若者のような理想的な夢を求めているが、それはシャボン玉のようなはかない泡のようなものである。ときどき生きている目的が分からなくなり、人生を退屈している。彼の善良な面が、退屈な家庭を捨てて、新しい生活を開くだけの勇気を与えていない。／著者は最後に、彼を北京の官僚生活から逃れさせ田舎に引退させることで解決しようとしている。田舎に行けば、Co-operatorの仕事や、子弟の教育が出来ると考えている。しかしラオ・リーのような男は、自分の理想にかなったお膳立てが出来なければ本当は何も出来ない人間だから、田舎にいけば今後は世の中のために何かやっていると印象を読者に与えない。主人公のあまりに消極的な性格は読者をイライラさせる。／この主人公は老舎自身をモデルにしたようである。何事も知り尽くしているのだけれど、若々しい情熱で新しい勢力に参加して行けない矛盾を老舎は描きだしたかったのであろう。ところが、あまりに自分自身に近い性格を取り揃えずぎて、自由に批判したり扱き下ろしたりすることが出来なくなったのではないか。／．．．」

☆その他『石垣綾子日記』で老舎に言及した個所を、参考までに挙げておく。

(上) 1946年<9月22日>・<9月29日>・<10月1日>
1947年<3月15日>

(下) 1949年<5月17日>・<6月4日>・<6月5日>

<書評>

杉本達夫 一九九六年読書アンケート第二回『中国図書』（内山書店）第9巻2号（97年2月1日）p.3

*「第二次大戦後のニューヨークで、老舎とも頻繁な交流があったかに思われる腰巻き

の文句につられ、期待したのだが、中国の革命前夜の老舎の胸中をうかがわせるくぐりはなかった。それはそれとして、この人も「女ひとり大地をゆく」「女傑なんだなと思う。」

平松圭子・劉力『女店員』の言語について『東洋研究』第119号（2月25日）p.25-35

高橋みつる 中国近代における人力車夫文学について（上）

『愛知教育大学研究報告（人文・社会科学）』第45輯（3月1日）p.47-54

*老舎「駱駝祥子」の参考文献。

「拙稿では、まず日中両国における人力車の歴史を概観したうえで、「駱駝祥子」前史、また「一件小事」「薄奠」研究の基礎調査という観点から、一九三五年までに発表された。〔人力車夫に関する〕詩・小説・戯曲を対象として、その内容を検討していきたい。」

日下恒夫 老舎《The Drum Singers（鼓書芸人）》

『關西大學 中國文學會紀要』第17號（3月19日）p.13-28

倉橋幸彦 旗人老舎 —その誇りと負い目

『關西大學 中國文學會紀要』第17號（3月19日）p.71-83

野口拓也『老舎と日中戦争』（新書摘録）

『中國文學報』（京都大学中国文学会）第52冊（4月）P.147

井波律子 四世同堂 老舎

『世界文学101物語』新書館（8月25日）p.178-179 →『中国文学——読書の快樂』角川書店（平成9年9月30日）II 中国古典を楽しむp.74-77

*【物語】【生活者の感覚・「正義」の冷たさ・美しい北京】

小島英男 老舎の相声<試験田>

[実践中国語学習法読解]

(1) 『中国語』第444号(12月15日) p. 25-27

(2) 『中国語』第445号(1月15日) p. 19-21

(3) 『中国語』第446号(2月15日) p. 257

<1997年>

渡辺武秀 老舎の初期作品と『駱駝祥子』

『八戸工業大学紀要』第16巻(2月)

p. 207-220

杉本達夫 老舎「一封家信」(妻のたより)

[精読]

第1回 『中国語』第447号(3月15日)

p. 62-65

第2回 『中国語』第448号(4月15日)

p. 62-65

第3回 『中国語』第449号(5月15日)

p. 62-65

最終回 『中国語』第450号(6月15日)

p. 62-65

伊藤敬一 老舎

『集英社世界文学大辞典4』集英社

(7月25日) P. 864-865

* 『駱駝祥子』 『四世同堂』 『茶館』

弓削俊洋 建国後の老舎と相声

—— 笑えない漫才

『野草』(中国文芸研究会) 60号

(8月1日) p. 51-65

李寧 『老舎と漱石 —— 生粋の北京人と

江戸っ子 ——』

[新典社文庫7] 新典社(12月12日)

定価 1500円 158p

(内容)

* 「はじめに」 / 「時代の変動期に身を置いた老舎と漱石」 / 「両作家の渡英と英国観」 / 「『老張的哲学』と『吾輩は猫である』」 / 「老舎と漱石から見た中国と日本文化の相違」 / 「おわり」 / 「あとが

き」 * 「あとがき」に、「小著は、一九九二年三月に筑波大学地域研究科に提出した修士論文に手直しをしたものです。

／筑波大学時代から、老舎と漱石の比較研究にとりかかり、修士課程を終えた当時、本書の前の三つの部分まで書き上げた内容は主として、歴史的背景、文学作品をめぐって検討したものです。残った部分(歴史的、文化的な比較)を続けてやりたかったのですが、諸般の事情で中断してしまい、原稿を今日まで眠らせてしまいました。」

趙清閣女士逝く

平松 圭子

新文学史料(2000年1期)に趙清閣女士の訃報(99年11月27日)が載っている。享年85歳。老舎と親交のあった人がまた一人世を去った。抗戦期「弾花月刊」、「弾花文芸叢書」の主編として活躍し、彼女自身も小説やドラマを創作し、映画のシナリオライターとしても名を知られている。老舎と知りあったのは1938年武漢である。武漢で頑張るといっていた彼女が重慶に移動することを決意すると、老舎は送別の席を設け、直接間接にかかわらず、抗戦に役立つ仕事をするのであれば、すべて価値がある、と彼女を励ました。(「漢川行」)。「抗戦は一切に優先する」という当時の老舎の考えが表れている。

1943年4月、老舎は趙清閣、蕭亦五と『虎嘯』(4幕劇、後に『王老虎』と改題)を書き、続いて同年趙清閣と『金声玉振』(4幕劇、後に『桃李春風』と改題)を書いた。第1、2幕を老舎が、第3、4幕を趙清閣が書き、老舎が全体をととのえた(序文による)。同年10月呉永剛演出、「中電」(中央電影を指すか?)によって上演され、ドラマの内容が剛直な教師と弟子の交流を描いていたため、教育的意義を国民党当局に評価され、ドラマも上演した

劇団も奨をとった(趙景深『我与文壇』)。

『老舎年譜』(張桂興)によれば奨を取ったのは1944年2月のことである。

これより以前1940年趙清閣は小説『鳳』を出した。老舎が序を書き、彼女の旺盛な文学活動をユーモラスに称賛している。

流亡到武汉, 我认识了许多位文艺界的朋友, 清閣女士是其中的一位。那时候, 她正为创刊《弹花》, 终日奔忙。她很瘦弱, 可是非常的勇敢; 独自办一个刊物已非易事, 她仿佛中了迷似的爱好着, 尝试着! 《弹花》并不能给她饭吃, 还须去作事挣来三餐。她是勇敢的! (老舎全集卷16)

彼女は酒豪であつたらしい。1940年6月郭沫若、田漢、左明と北碚の郊外北温泉に遊び、縉雲寺を訪れたとき郭沫若が彼女に贈った五言絶句

豪气千盅酒 錦心一弹花 縉云存古寺
曾于共甘茶。

1945年10月23日、重慶を離れる彼女を老舎と傅抱石が訪ね、傅抱石が「紅楓扁舟」と題する絵を贈り、その絵に老舎は即興で五言絶句を記して送別の辞とした。

风雨八年晦 霜江万叶明 扁舟載酒去
河山无限情 (詩はいずれも新文学史料1995、3期「趙清閣文芸生涯年譜」による)

<事務局だより>

◇ 99年度大会は7月23日早稲田大学で開催されました。発表者とテーマは次の通りです。

○緒方 昭：『四世同堂』にみる弱者への愛
—— 瑞宣像を中心に ——

○渡辺武秀：老舎幽默作品中の「悲劇」について

○山口 守：老舎とアイダ・プルーイット

○藤井栄三郎：「祭子路之岳母文」
—— 老舎文学の一側面について ——

◇小林康則委員が1月亡くなられました。本会の設立当時から会の活動に協力くださり96年からは常任委員として支えてくださいました。中国の老舎研究会開催の折には、一緒に北京や重慶を旅したこともあります。いつもビデオカメラを担いで写真をとっておられました。それらの写真は将来貴重な資料になることと思います。心からご冥福をお祈りいたします。

◇老舎や老舎の作品に関連するエッセイ、論文、書評など、会員各位の投稿をお待ちします。5月末日までに投稿くださればその年度の会報に間に合います。

◇本号も執筆者各位に無理をお願いしました。ありがとうございます。

老舎研究会会報第14号

(2000年7月21日)

〒175-8571 板橋区高島平1-9-1

大東文化大学中国語学科207

(平松) 研究室 老舎研究会事務局

TEL:03-5399-7370 (中国語学科事務室)

FAX:03-5399-7371 ()